

論文内容の要旨

論文題目 青年期の性の自己評価尺度の開発

(Development of Sexual Self-assessment Scale for Adolescents)

指導教員 大島久二 教授

東京医療保健大学大学院看護学研究科

2019 年 4 月入学

博士課程看護学専攻

氏名 山上妙子

I. 緒言

わが国における若者の性感染症罹患者は、増加の一途を辿っており、20～24 歳の人工妊娠中絶数も漸増している（厚生労働省 2019・2021）。要因としては、高校生で 20%前後、大学生で 50%前後と性交渉経験率が増加しているにも関わらず、それに伴う性教育が十分に行われていないことが考えられる（日本性教育協会 2019）。これらの状況から、性に関する科学的な知識を修得した上で、自身がどのような性的傾向にあるのかを理解していることが重要であると考え。そこで本研究では、諸外国の包括的性教育(CSE)で多く活用されている「The Circles of Sexuality (Dailey 1981・2017)」を理論的概念として、性行動が活発化する青年期を対象とした性の自己評価尺度（以下、SSAS）を開発することを目的とする。本研究の意義は、本尺度が開発されることで、自己の性的傾向が可視化され、自身の性の傾向を見つめ直すことが期待できる。これまで、当事者である若者自身の性的傾向を評価するための尺度や、本人の性的傾向を自覚させる目的をもった尺度は少なく、性を包括的に捉えた概念から開発された尺度は見当たらないことから新規性があるといえる。高校や大学の保健室で性の健康に不安を感じて相談にくる学生のカウンセリングや、産婦人科や泌尿器科、性感染症クリニックなどの医療機関で患者の性的傾向を自覚させるツールとして活用できる。

II. 研究方法

本研究は以下の手順で進めた。① 文献検討を通して、SSAS を構成する仮説概念の定義の確定と、SSAS 尺度項目を精選し、専門家による内容妥当性を検討し、ヒアリングを通じて表面妥当性の検討

を行った。② SSAS 原版を作成するため、18～24 歳の高等教育機関に所属する 437 名を対象に Web による質問紙調査を実施し、①で作成した尺度の探索的因子分析結果と外的基準として設定した「大学生用リスクテイキング行動尺度(小塩 2001)」および「Rosenberg 自尊感情尺度日本語版(Mimura et al. 2007)」、性交経験との関連から妥当性を検討し、信頼性係数の算出から内的整合性を検討した。③ ②の結果から、新たに生成された概念の定義の検討と、尺度の追加修正項目を精選し、専門家による内容妥当性と対象年齢に該当する若者のヒアリングによる表面妥当性の検討を行い、修正版を作成した。④ 修正版の信頼性・妥当性を検証するため、インターネット調査会社(A 社)に登録している 18～24 歳の高等教育機関に所属する 500 名を対象に Web による質問紙調査を実施し、探索的因子分析と外的基準として設定した草野(2007)の性的自己意識尺度(以下、自己意識尺度)と性的リスク対処意識尺度(以下、リスク対処意識尺度)、性交経験・性欲の程度との関連から構成概念妥当性を検討した。また、信頼性係数の算出から内的整合性を検討した。本研究は、東京医療保健大学ヒトに関する研究倫理委員会の承認を得て実施した(院 31-67A, 院 33-45B)。

Ⅲ. 結果

1. SSAS 原版の作成と信頼性・妥当性の検証

諸外国の性教育で活用されている「The Circles of Sexuality (Dailey 1981・2017)」の 5 つの概念(Sensuality, Intimacy, Identity, Reproduction, Sexualization)の文献検討から定義を確定し、尺度項目の草案を作成した。専門家によるスーパーバイズと調査対象に該当する若者のヒアリングを通じて 5 概念 45 項目となる尺度項目を作成した。同意の得られた首都圏の 8 施設(大学 6 施設, 専門学校 2 施設)に所属する 18～24 歳の 437 名から回答が得られ、359 名を分析対象とした(有効回答率 82.2%)。性交経験を有する者は 209 名(58.2%)である一方、性感染症罹患経験の未経験者は 95%、妊娠した(させた)経験の未経験者は 97.8%と性的にローリスクな集団であることが推察された。また、項目分析から除外基準を満たした 22 項目を除いた 23 項目について探索的因子分析(主因子法・プロマックス回転)を実施し、因子負荷量が.40 未満の項目を除き、近接性($\alpha = .81$)官能性($\alpha = .73$)、生殖性($\alpha = .67$)、親愛性($\alpha = .74$)の 4 概念 19 項目が生成された。性交経験との関連は、原版・下位尺度ともに有意な関連が認められたが($p = .001$)、外的基準尺度との相関は認められなかった。

2. SSAS 修正版の作成と信頼性・妥当性の検証

1 回目の調査結果を勘案し、生成された概念の定義の再検討と尺度項目の洗練を行い、専門家によるスーパーバイズと調査対象に該当する 5 名によるヒアリングから、内容妥当性と表面妥当性を検討し、4 概念 25 項目の修正版を作成した。また、1 回目の調査結果を鑑みて、外的基準尺度は性を包括する尺度を設定した。調査は、A 社に登録する 18～24 歳の高等教育機関に所属する 500 名を対象に、Web による質問紙調査を実施した。性交経験を有する者は 191(38.2%)と少なかった。項目分析から除外基準を満たした項目を除く 23 項目について探索的因子分析(最尤法・プロマックス回

転)を実施し、因子負荷量が.40 を満たさない項目を除いた 4 概念 22 項目の尺度が生成された(表 1)。

表 1 SSAS 修正版の探索的因子分析

($n=500$)

因子名 Cronbach' s α 項目内容	第1因子 (I)	第2因子 (II)	第3因子 (III)	第4因子 (IV)	共通性
第1因子：官能性 ($\alpha=.846$)					
6. 私は、性欲を満たすために性交（セックス）を迫る傾向がある	0.83	0.06	0.09	-0.21	0.65
8. 私は、自分の性欲は性交（セックス）で満たされる（と思う）	0.69	0.01	0.04	0.07	0.57
7. 私は、自身の性的魅力を使って誘惑する	0.69	0.15	0.02	-0.19	0.45
10. 私は、アダルトサイト等の画像や動画と同じような性交（セックス）がしたい	0.68	-0.11	0.02	-0.06	0.40
9. 私は、金品等のために行う性交（セックス）はしても良いと思う	0.57	-0.14	-0.03	-0.03	0.26
22. 私は、性交（セックス）時の身体の生理的反応（濡れる・勃起する等）に関心がある	0.51	-0.03	-0.05	0.45	0.63
23. 私は、自分の性的な快感が得られる方法を知っている	0.49	-0.04	-0.13	0.46	0.54
第2因子：親愛性 ($\alpha=.819$)					
14. 私は、人に対して思いやりが深い	-0.07	0.82	-0.03	0.03	0.63
15. 私は、人に対して愛情が深い	-0.08	0.79	0.05	0.04	0.65
16. 私は、困っている人を見ると放っておけない	-0.22	0.69	0.03	0.06	0.46
12. 私は、人と良好なコミュニケーションを図れる	0.13	0.57	-0.03	0.07	0.44
13. 私は、人に対して心をオープンにさらけ出せる	0.28	0.55	-0.04	-0.11	0.38
第3因子：近接性 ($\alpha=.867$)					
4. 私は、人にも自分と同じくらいの愛情を求めてしまう	-0.06	-0.09	0.83	0.02	0.59
3. 私は、人との身体的な距離感が近いほど幸せを感じる	0.09	0.05	0.76	0.00	0.72
2. 私は、人前で行える程度の「手を繋ぐ」「腕を組む」等のスキンシップを求める	0.18	0.09	0.59	-0.01	0.56
18. 私は、人との心の距離感の近さで幸せを感じる	-0.12	0.14	0.59	0.17	0.51
5. 私は、スキンシップ以上のイチャイチャを好む	0.37	-0.10	0.56	0.06	0.65
第4因子：生殖性 ($\alpha=.757$)					
24. 私は、年を重ねると妊娠しにくくなることを知っている	-0.34	-0.07	0.17	0.69	0.39
25. 私は、不妊症にならない生活（非喫煙・性感染症予防等）について関心がある	0.09	-0.01	0.02	0.63	0.47
19. 私は、自分の身体的な性別に満足している	-0.20	0.08	0.02	0.61	0.35
21. 私は、自分の身体が子どもをつくるための機能を有しているか関心がある	0.17	0.09	-0.04	0.56	0.49
20. 私は、自身の好みのタイプの性（性指向）を理解している	0.14	0.14	-0.03	0.46	0.38
尺度全体 $\alpha=.911$	固有値	7.82	2.48	1.43	1.40
	寄与率 (%)	35.53	11.26	6.48	6.35
	累積寄与率 (%)	35.53	46.79	53.27	59.62
因子間相関	I	II	III	IV	
I	—	0.39	0.55	0.52	
II		—	0.54	0.60	
III			—	0.54	
IV				—	

最尤法 プロマックス回転 適合度検定: $\chi^2=521.067$, $df=149$, $p=0.000$

KOM 値: 0.901 Bartlett の球面性検定: $\chi^2=3573.063$, $df=120$, $p=0.000$

また、性交経験および性欲の程度との関連では、修正版とその下位尺度すべてに有意な関連が認められたことから ($p < .01$)、概ね構成概念妥当性は確保されたと判断した。また、外的基準尺度との相関分析の結果、自己意識尺度では、修正版と「官能性」「生殖性」で中程度の正の相関 ($r_s = .68$; $r_s = .61$; $r_s = .53$, $p < .01$) が、「親愛性」「近接性」と弱い正の相関 ($r_s = .46$; $r_s = .45$, $p < .01$) が認められ、リスク対処意識尺度においても、修正版と「生殖性」で中程度の正の相関 ($r_s = .53$; $r_s = .62$, $p < .01$)、「官能性」「親愛性」「近接性」で弱い正の相関 ($r_s = .35$; $r_s = .47$; $r_s = .37$, $p < .01$) が認められたことから、基準関連妥当性も概ね良好であると判断した。信頼性分析では、修正版 22 項目 ($\alpha = .91$)、官能性 ($\alpha = .85$)、親愛性 ($\alpha = .82$)、近接性 ($\alpha = .87$)、生殖性 ($\alpha = .76$) となり、折半法では .934 と内的整合性が確保された。

IV. 考察

本研究は、諸外国の性教育で活用されている「The Circles of Sexuality (Dailey 1981・2017)」を用いた理論的概念を仮説概念として尺度開発を行ったが、5つの仮説概念が4つの概念となった。セクシュアリティは文化・社会的背景により変化する (Dailey 1981・2017) とあり、わが国では性「快楽性」「連帯性」「生殖性」の3側面で捉えている (青木ら 2003) ことから、わが国の文化や現代の若者に対応した概念へ導かれたことが窺える。「近接性」は、本研究により生成された概念で、肉体的な快楽ではなくその近さから得られる喜びであるため、性行動が加速するとセクシャル・コンタクトに繋がる可能性があり、わが国の3側面である「快楽性」に繋がる新しい概念であると考えられる。これは、現代の若者に対して教授すべき性教育の新概念ともなり得ることが考えられる。

SSAS の活用方法は、自己の性的傾向を自己評価するツールであることから、尺度項目の意味内容から、得点の高低で善し悪しを評価するものではない。尺度全体の得点が高いからといって優劣を評価するものではなく、4つの概念の特徴を考慮しながら性的傾向を評価するツールとして活用する。また、本尺度は、測定時の自己の性的傾向を評価するものであり、新たな環境や人との出会いによって、性的傾向は変化することが予測でき、定期的に評価して、その得点に至った背景を振り返ることが重要であると考えられる。本研究の課題として、Sampling bias がある。若者の性行動は、性感染症や人工妊娠中絶など活発化した性行動がみられる一方で、性行動経験率が年々減少している現状から2極化していることが推察される。2回目の対象者は、性交未経験者が4割弱であり、後者に属する集団であることが考えられ、対象を高等教育機関の学生に局限しなかった場合、SSAS の構成概念に影響を及ぼした可能性があると考えられる。加えて、A 社のパネルであることも母集団を反映しているとは言い難いため、今後は対象を局限せずに調査を実施し、尺度の洗練を図る必要がある。また、より精度の高い尺度にするため、安定性の確認や確認的因子分析によるモデル適合度の検証を実施し、より幅広い年代に適応したツールとなるよう改良していく必要がある。

V. 結語

本研究で開発した青年期を対象とした性の自己評価尺度は、22 項目 4 因子構造からなり、信頼性と妥当性が検証された。